日刊 動労千葉

国鉄千葉動力車労働組合
〒280 千葉市要町2番8号（動力車会館）
電話｜（鉄電）千葉 2935・2936番
（公）千葉（22）7207番

91.2.6 No. 3344

1・31報告（その1）大須賀君の遺志を引きつぎ「JR体制」の打倒を魂に誓う！

一・三一動労千葉総決起集会は、故大須賀昭男君追悼と九一・三ダイ改阻止へ向けた反撃の口火をきる場として、千葉市民会館において開催され三五〇名にも及ぶ結集の下、「JR体制」打倒へ―大須賀君の遺志をひきつぎ、全力で闘い抜くことを全員が心に誓った。

冒頭、主催者を代表してあいさつにたった中野委員長は、「本日の大須賀君追悼、九一・三ダイ改阻止集会に多くの方の結集と御遺族の参列をいただき大変ありがとうございます。

われわれは、この悲しみにうちひしがれることなく彼の無念を思い、われわれがかわりに闘い抜くことを強く組合員のみなさんに訴えたい。

彼はまさに、たたきあげの国鉄労働者であり、情熱と正義感の人であった。であるがゆえに、労働運動に参加し、青年部運動のリーダーからはじまって、常に組合員の先頭で闘い抜いてきた。

ジェット燃料貨車輸送阻止闘争―分割・民営化阻止闘争、とりわけ成田運転区廃止に対する断固としたストット＝第二波二・一五ストの指導責任を問われた不当解雇以降も、争議団の中心的メンバーとして、解雇者が自らの力で生活基盤を築いていくために、ビルメンのノウハウを会得してきた。

昨年の忘年会では、『来年からフル回転だ』と言っていた。その矢先に、不帰の人となった彼の無念はいかばかりか、片腕をもぎとられるようなダメージであるが、彼がなしとげようとしていたことを、われわれがなしとげることが重要であると考える。

御遺族の心情を察するに余りあるが、われわれの信頼すべき仲間である大須賀君が天国からわれわれの戦列に加わり、見守っていると考えるところです」と切々と訴えた。

田中書記長のダイ改阻止へ向けた報告（次号詳細掲載）を受けたあと、以下の来賓の方々から、大須賀君の魂にささげる追悼のことばを受けた。

県労連センター・広田事務局長、社会党千葉県本部副委員長・市川福平県議、社会党・小川国彦衆院議員（メッセージ代読）、社会党・上野健一衆院議員、反対同盟・北原事務局長、組織内として、中江昌夫船橋市議、動労千葉OB会・松崎会長、家族会・佐藤会長。

一・三一集会は、七五〇名組合員の心を一つにした集会として、心のこもったものとして勝ちとられた。大須賀君の遺志をひきつぎ、全力で闘い抜かなければならない。

昨年暮、公判における証言の打ち合わせで、二回にわたって会ったが、その意気軒昂な姿がやきついている。証言が実現していれば、現場における人間無視の攻撃を暴き出し、国鉄当局のずさんな姿を明らかにしていたであろう。

そして、労働者としてそれを撃破していく真理を鮮明にしえたであろう。これこそ、動労千葉の原則的闘いの証左であらんと考える。

大須賀君は、原告団の中心的メンバーとして責任感の強い方であった。弁護団も、大須賀君の無念を晴らし、闘い抜くために力を結集し、動労千葉と一体化して全闘争に勝利する。

動労千葉弁護団
大口弁護士

成田支部
高柴支部長

一～二波闘争当時、書記長であった大須賀君の四七才での他界は、残念でならない。

大須賀君は、常に闘いの先頭に立ち続けてきた。

分割・民営化攻撃―成田運転区廃止、松戸電車区の運転士に対する一ヶ月を越える線見阻止闘争を指導しえたのも、彼の力によるものであった。

彼は、自分でなんでも仕事を引き受ける、頼まれるとイヤと言えないタイプの、信頼感の厚い人物だった。二・一五第二波ストに対する不当解雇―争議団の中心的存在として、昨年十月、新会社設立、これからという時であった。

彼の意志を継いで、この会社を大きく育てていきたい。

―謝辞―
故大須賀氏夫人

本日のすばらしい追悼の会を催していただきましたこと、主人も天国で喜んでいてくれていると思います。

十五日間の闘病生活、必ず生きて帰りたかったことと思います。成田支部のみなさん、仲間のみなさんがいつもかけつけてくれたことが、主人の胸に生きていると思います。

これからも、力を合わせて生き抜くことを、みなさんと共に歩むことを誓いたいと思います。